10:20~10:50 人文社会系研究科

堀江 宗正 准教授
Norichika HORIE

研究分野： 死生学、応用倫理、宗教学、スピリチュアリティ研究

研究内容： 日本人の死生観、死後観を、宗教学的な観点から調査したり、考えたりしています。最近の調査・研究のテーマには、現代仏教における霊魂観と生命観の関係、東日本大震災の被災地での霊的体験、宗教と自殺の関係、サブカルチャーにおける魔術の表象、現代日本における魔女の生い立ちなどがあります。

2000年３月　東京大学大学院人文社会系研究科単位取得退学
2001年４月～2007年３月　聖心女子大学文学部専任講師
2007年４月～2013年３月　聖心女子大学文学部准教授
2008年９月　東京大学大学院人文社会系研究科　博士（文学）
2009年８月～2010年３月　UC Berkeley客員研究員
2013年４月～現在　東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター准教授

生命に根ざした思考――哲学・宗教・倫理の歴史から

宗教における生命

生命を動かす原理の探求は、哲学や宗教の根本課題でした。アリストテレスは生物と無生物の違いを、魂の有無に求めました。ユダヤ・キリスト教においては、生命は神から来て神へ帰ると信じられました。仏教では魂は無我とされ、要素に分解してとらえられると同時に、そのような「空」のあり方に沿って生きることがすすめられました。さらに大乗仏教では、そのような生々流転の全体が仏の無限に続くいのちとしてとらえられました。このように宗教においては、生命が生命をとらえる観照・瞑想のなかで、個を超えた全体とのつながりが直観され、それに逆らわずに生きる実践がすすめられていたのです。

機械論の登場

ところが初期近代には、デカルトやラ・メトリが生命を機械として捉える考えを打ち出しました。生命は、物理・化学の法則で説明可能だと考えられるようになりました。また、進化論は生命を自然淘汰の結果と考えます。こうして、神、魂など、超越的な説明原理は不要となり、生物学、生理学、心理学は、宗教や形而上学から独立したのです。

いのちの思想

しかし、このような考え方は、近代社会における人間の機械化、物象化の背景要因だと批判する思想も出て来ました。機械論に対しては、目的論・有機体論が対置され、還元論に対しては生気論や全体論が対置されました。これらの生命主義は、日本では大正期に哲学、文学、宗教において受容されました。そこでは、個体の生命、生殖活動、再生産を包み込む、全体としてのいのちが想定され、いのちのつながりの大切さが説かれました。今日でも、公害問題、原発再稼働、企業による食や健康を脅かす問題において「いのちを守れ」がスローガンとして強調されています。

生命科学と機械論

生命論においてもオートポイエーシス論など脱機械論の動きは見られました。生命はエントロピー増大、自らの崩壊に抵抗して、絶え間なく再生し、常に外部と入れ替わりつつも均衡を保ちます。そのような自己組織化と再生のシステムとしてとらえられました。しかし、DNAの二重らせん構造の発見、複製と遺伝への注目は、機械論的思考を強化しました。生命科学においては、生命が生命を作る自然な営みが探求されるだけでなく、人工的に生命が作られます。広い意味でのシミュレーショニズム、つまり人工知能、人工細胞、バイオミミクリー（生物模倣技術）などは生命の理解のために有意義かもしれません。しかし、クローン技術や遺伝子操作による生命の創造は、宗教的にはタブーと考えられます。

生命倫理の要請

今日、医療技術や生命科学の急激な進歩の倫理的妥当性を問うような生命倫理が要請されています。クローン技術、医療目的での生命創造と利用、自由主義的な新優生思想、生物学上の親子関係の混乱、エンハンスメント、心のコントロール、バイオバンク構想など、考えるべきことはたくさんあります。

今まで存在しなかった生命倫理問題が提起されると、伝統的生命観は根本的に問い直されますが、同時にその意義も見直されつつあります。倫理の基盤となってきた生命の存在のあり方そのものを変えてしまえば、倫理は成り立たなくなります。それはいったん変えてしまうと、取り返しがつかない結果をもたらします。技術の応用にお墨付きを与えるような専門家もいますが、原発事故、STAP細胞問題以後、市民社会からは厳しい目が向けられています。

講演当日は以上の議論を踏まえて、生命科学と政治・経済との関係、文理の対立を超えた生命科学者像についての提言もおこないたいと思います。